

# 平成二十二年度第二十回全国読書作文コンクール

## 小学生の部・大賞

今のままでいい

榎本 ころろ

あれ？春じゃないやん。私は初め「さつさら春風 もしもはすてて」だから、春の季節だと思っていたけど、その考えは大きく違っていて、主人公・丈夫の初めての詩だったんです。

私がこの本を選んだのは、「さつさら春風 もしもはすてて」の「もしもはすてて」の中に、どんな意味が込められているのかと思ったからです。

主人公・丈夫はいつも、「自分の障害、兄弟の障害がなければ」と奇跡を求めています。私はいつも、そういう丈夫のうじうじしている所を読むと、「そんなの願っても」と思っているながら読んでいたのに「アツ私も同じや」とふと気付きました。私の家は離婚して、大好きなとうちゃんときき別れになってしまいました。私はずっと、また、とうちゃん、かあちゃん、お兄ちゃん、私の四人で楽しく暮らしたいと願っていました。

奇跡を求めているのは私も丈夫と同じで、それはまるで暗い部屋に二

人で、開いている出口にもむかわず、ただ、だまってすわっている様でした。ところが最後まで読み終わると暗い部屋にいたのは私だけでした。

どうしてかと言うと、丈夫はお姉ちゃんの死と詩で、お姉ちゃんの分まで生きようと前向きになったからです。私も前向きになれるかなあと思いつきながら、本をペラペラめくっていると、急に手がとまりました。そのページは、丈夫がサッカーの試合でバカにされた日の、お姉ちゃんの詩でした。「毎日、笑って、笑って笑いころげた。これからも、きつと笑顔でいられる。」この二行で私は気付きました。私も毎日笑って楽しく暮らしてた。とうちゃんがいた日も楽しかったけど、とうちゃんがいなくても楽しく暮らしてきました。

やっぱり読書感想文はスゴイです。書けば書くほど、新しい自分が見つかってくるからです。前は大嫌いなブロッコリーが晩ご飯にでてきた時みたいに悲しかったけど、今は、おこづかいをもらった時みたいうれしいです。

私はわかりました。

今のままでいい。

対象図書名 さつさら春風「もしも」はすてて

## 大賞へ、審査員のひとこと

「やっぱり読書感想文はスゴイです。書けば書くほど、新しい自分が見つかってくるからです。前は大嫌いなプロッコリーが晩ご飯にでてきた時みたいに悲しかったけど、今は、おこづかいをもらった時みたいにうれしいです。」という文章はスゴイ、名文です。審査員全員の言葉です。本を手にしたことで、真に大切なことがわかったのですね。本の感想文にとどまらず、本から触発されて自分の考えを自分のことばで書いてほしい、という読書作文コンクールの願いがこの作品には満ち満ちています。一冊の本が貴方の「今のままでいい」ことに役立ててとてもうれしいです。

## 受賞者のひとこと

教室で私が大賞だと知らされた時、本当に驚いて言葉が出ませんでした。「今年も賞取れたらいいなあ」とお母さんに言った時、「取っても取られへんでも、頑張ったからいいねん」と言ってくれました。そういえば、書き上がった作文の「とうちゃんがいなくなっただけ、ずっと笑ってくらしてきました」という部分を読んで、お母さんは泣いてくれました。私はなんだかとてもうれしくなりました。この作文を書いて、本当によかったなあと思えました。

正直に言うと、読書感想文は得意ではありませんでした。でも、塾の先生に教えてもらった方法で書くと、思った通りのことがすらすら書け

ました。今では作文を書くのが好きになったくらいです。

私に、作文を書く面白さと喜びを教えてくれたこのコンクールに、本当に感謝しています。審査員の皆様、塾の先生、かあちゃん、ありがとうございました。

## 小学生の部・最優秀賞(小四)

家族がいるからがんばれる！

安藤 初

私は鈴と同じで、料理も犬も大好きだ。料理の手伝いは小さい頃からやっていたので、今では一人でも作れるメニューが増えた。特に、クッキーやケーキ作りには、自分でも自信がもてるようになった。

でも、これまでに何度も失敗があった。分量や、やり方をまちがえて変な味や形になったことがある。そういうたくさんさんの失敗から学んで、「次は、上手に作るぞ」という気持ちで、どんどん挑戦してきた。何度も作っている内にだんだん慣れてきて、手早く作れるようになる。その感覚が自分でもとてもうれしい。家族に美味しいと喜んでもらえるのもっとがんばりたくなる。

私の、これまでの自信作は、去年の冬に作ったクリスマスケーキだ。材料をそろえ、まぜたり、焼いたり、最後のデコレーションまで、全部ひとりで行った。時間はかかったけれど、それだけに達成感でいっぱいになった。家族みんなが喜んでくれた。おいしいとほめてくれた。私の手作りのケーキを囲んで、思い出に残る最高のクリスマスとなった。

私のおばあちゃんの家では野菜を作っているのでよく送ってもらう。

箱をあけると、いろんな野菜がいっぱい。何を食べても甘くておいしい。特にトマトは最高だった。おばあちゃんが真心が伝わってくる。私はもらった野菜を使って、いろいろなメニューを工夫してみた。出来上がる度に写真をとって岩手にいるおばあちゃんにメールを送った。これは「せっかく作った料理をおばあちゃんにもみてもらおう」というお母さんのアイデアだった。送る度に、おばあちゃんもほめてくれるのでとてもうれしい。

鈴が料理をがんばれたのは、リンがいたからだ。そして、家族みんなが「おいしい」と喜び、ほめてくれたからだと思う。鈴が決勝戦で作った、「ライスケーキ」は、まさに家族一人一人のことを思って、それを形にしたものだった。出来上がったライスケーキを六等分に切り分けるところも良かった。リンも入れて六人家族だからだ。

鈴が優勝したのは、単なる技術ではなく、家族を思う心と、料理を楽しむ心があったからだと思う。「私なんかだめ」と自分に自信がもてなかった鈴は、もうどこにもいないはずだ。

対象図書名 鈴とリンのひみつレシピ！

最優秀賞

「最優秀賞、おめでとう！」と先生に言われ、とてもおどろきました。

電話で聞いた母も信じられないというような感じでした。私は、この本

を選んで良かったと、改めて思いました。料理も犬も大好きなので、迷わず「鈴とリンのひみつレシピ」に決めました。読んでいる内に、書きたいことがどんどん浮かんできました。自分の経けんがたくさんひらめきました。だから、書くのが楽しかったです。

去年は三年生だったので、まだ正式に応ば出来なかったけれど、課題図書を読んで、上級生と同じように作文を書きあげました。セミナーでは、三年生までは「修業」の期間です。私にとって、今年がデビューです。先ばい達のように、いつかは大きな賞がとれたらいいなあと思っていました。それがこんなに早く、「最優秀賞」をいただき、うれしさいっぱいです。

私にとっては始まったばかりなので、これからがんばっていこうと思います。

## 小学生の部・最優秀賞(小五)

心

田中佑芽

私は、思った事がはっきりと、言えるタイプだと思います。でも、時々どうしても言えない相手に会おう事もあります。その時には私の心に「グッ」と、相手に言えなかった事をしまいこみます。心にしまいこむと心の中が、つらく苦しいのがいっぱいになります。そうすると私の中に「黒い芽」ができます。「黒い芽」が出てくると心の中で「つらいなく。しんどいなく。」と思い始めます。そうなってしまうと心の中でいろいろ考えてしまいます。「言えばよかったかなく。」「言っても言いかえされるだけでいやな気持ちにきつとなるなく。」「どうしたらいいのかなく。」とかを、自分自身に問いかけてしまいます。そのうち、「黒い芽」がどんどん大きくなるように感じます。そんな時、私は芽が大きくなりすぎる手前でいろいろ考えたりする事を忘れるかのように、体をいっぱい動かします。今やらなければいけない事に集中して、その事を忘れ、無かった事にします。

他にも「黒い芽」を小さくする方法があります。うまくいかなかった時や、どうしても前に進めない時があります。心の中が「モヤモヤ」して、はげしすぎる時には、雷が落ちたようになります。頭の中や体中が

「ビリビリドツカーン」となり、もう、自分が自分でなくなるような感じになる事もあります。そうなればもう、何も出来なくなってしまう。こうなった時には、ベッドに横になりぐっすりねむります。すると、目が覚めた時、自分が自分にもどっているような感じがします。それから、出来なかった事をもう一度やります。そうすると、うそのようにすぐ出来たり解決したりします。これでほしい私の「黒い芽」は落ち着いてくれます。

私の家族は、お父さん、お母さん、私、弟の四人家族です。弟はまだ小さいので、家族四人全員の心が通じ合うのは、まだチョットむずかしいと思います。お父さんとお母さん、お母さんと私のように信らいをする事が出来る関係は、築けられていると思います。もともと私や弟が大人に成長していけば、四人全員が心を通じ合わせる時が来るのではないのかなと思います。心が通じ合うというのは、信らいの先にある物だと私は思います。

私が生きていく中で、絶対に「黒い芽」はなくなる物だと思いません。「黒い芽」とどのように、つき合っていくかで、これからの私の進んでいく道が出来るのだと思います。今は「黒い芽」が大きくなるように、自分なりにコントロールしていこうと思います。この先家族以外にも、信らい出来るような関係が築ける人と出会えると、とっても幸せだと思います。

## 受賞者のこと

読書作文コンクールの本の注文の紙をもらい、本を読むのは好きだけど、作文を書くのはめんどくさいな、いやだなと思いました。本のタイトルに一目ぼれ、内容もおもしろそうだったので、「誰かがうしろに」という本に決めました。

読み始めると、三人の主人公の心の中の世界、友情、絆、なやみ、考える事、感じる事が私の中に「スウー」と入って来るような感じがして、「あっ」というまに読んでしまいました。でも、思った事、考えた事を文章にする事がすくむずかしかったです。

先生に受賞の事を聞いてうれしさのあまりに一しゅん時が止まったように感じました。

この喜びをわすれず、これからもっと思った事を文章にできたらいいなと思いました。

## 小学生の部・最優秀賞(小六)

### 想い

岡本 萌子

どうして、「障害」というものがあるのか。

そんなものなどなければ誰も傷ついたり、苦しんだり、悲しい思いをす  
る人などいないのに。

わたしは、生まれつきこめかみの所に「母班細胞母班」というあざの  
様なものがあり、幼い頃人に指さされたことがある。その時母は笑いな  
がら私に、「どんなに大勢の中でも萌ちゃんだとすぐわかるようにと神様  
からの贈り物なんだよ。」と言ったのを覚えている。今思うと、その時の  
母の本当の気持ちはどうだったのだろうか。私は聞いてみた。すると母  
は「そんな事もあったよな。」とぼそっとつぶやき、一呼吸おいて話し始  
めた。「正直、初めてあなたを見たとき、ああ、女の子なのにどうしよう。  
お腹の中に居る時、なにか変な事をしただろうか。」など、とにかく想像  
できるありとあらゆる悪いことを考えたという。「一人になると、泣いた  
事も何度かあるよ。でもね、こうして元気でいてくれることがありがた  
いと思うんだ。」と笑いながら言った。恵、丈夫の両親も同じ様にそう思  
ったにちがいないと感じた。

こんな話を聞いたことがある。障害を持って生まれた人は、そうでな

い人の「身代わり」だと。衝撃的だった。健康で生まれる事が当たり前  
でない、と母からよく聞かされていたがその通りだと思う。が、しかし、  
「身代わり」という所まで考えた事など今まで一度もなかった。胸を矢  
で射られたような感じがした。一日一日、一分一秒たりとも無駄に生き  
ては恵、丈夫、静に申し訳ないと想った。

私は、恵は強い人だと思った。なぜなら死ぬことがわかっていながら  
毎日を笑顔で過ごしたからだ。怖くないのだろうか。いや、絶対に怖か  
ったはずだ。「生きてればええやん!。」と叫んだこの言葉が恵の本当の  
気持ちだったと私は思った。

丈夫は恵の「お姉ちゃん」が、丈夫の左手になる。」という一言で大きく  
人生が変わったのではないか。恵がいなければきっとポケットから手  
出す事も出来ず、ただただ現状に不平不満を言うだけになっていたよう  
な気がする。

丈夫は、お父さんの仕事に対する考え方も、恵の死を通して大きく変  
わった。生前恵が「真心」と言っていた意味も恵の「納棺式」を見て、  
初めて理解できたのではないだろうか。「葬儀社」のことも今はきつと「す  
ばらしい職業」だと実感しているに違いないと想う。

恵の生きざまは、多くの人に影響を与えたと想う。人がこの世に生ま  
れて来るといふ事はそれがどんなに障害を持っていようが一つの無駄も  
ないと。何かの役目を必ず持って生まれてくるのだという事を。わたし  
も恵の様な「真心」を持ち、人の役に立てる人間になりたいと心から想

った。

対象図書名 さつさら春風「もしも」はすべて

### 受賞者のこと

先生から受賞の事を聞いた時、「えっ？わたしが……」。とあまりの驚きで言葉も出なかった。ただ、顔の筋肉がゆるんだのだけは覚えている。そばにいた母が歓喜の声を上げていた。家に帰り父と弟に伝えると「やった。水族館に行ける！」と大喜びしていた弟の姿が印象的だった。父も自分の事以上に喜んでくれた。そんな家族を見ていると、「幸せ」な気持ちになれた。そしてこの本に出会い母の私に対する想いを初めて知った様な気がした。これからも色々な体験や経験を通じ「心」で感じられる人になりたいと思った。

## 中学生の部・大賞

### 「新しい風に吹かれて」

松木 俊樹

家庭の問題……。はたから見ると一見幸せそうな家にも、もしかしたら、人には言えない様な深刻な問題があるのかもしれない。その問題に立ち向かう術をどうやって学ぶのか。主人公が身をもって、僕たちに教えてくれた。

ここ数年、僕も家の状況がめまぐるしく変わり、精神的に全く余裕が無かった。僕の父は一代で食品関係の会社を築き、様々な商品開発を行い、地元では優良企業として高い評価を得てきた。幼い頃から、そんな父の姿を見てきた僕は、父を尊敬し、自分もその跡を継ぐものだと考えていた。ところがある日、突然の倒産。まだ小学生だった僕には難しいことは分からなかったが、一夜にして家の状況が一変した。父はがつくりしている暇など無く、今後どうするかで奔走していた。父を支えてきた母も僕を心配させまいと「みんな健康だし、また頑張ればいいんだから」と明るく言っていたが、両親の辛さは計り知れないものがあつたはずだ。その時点では、同じ家に住み、今まで通り同じ学校に通っていたので僕自身の生活には大した変化は無かった。小学生の僕は無邪気なも

のだった。

しかし、その生活も長くは続かなかつた。去年、住み慣れた家を手放さなければならなくなったのだ。人生、予想もしていなかったことが突然起こるものだとはよく聞かすが、まさか、自分の身に何度も起こるなんて

……。この家は僕にとって、まさに生まれ育った家だ。地元の隅から隅まで慣れ親しんだ場所。僕にとっては、この地元が、この家がまさに「故郷」なのに。この土地を、この家を離れるなんて。僕は心の整理が出来なかつた。いつも気丈な母も、僕の気持ちを察してか、とても辛そうだった。僕は一人になって考えた。二年前、父の会社が無くなったあの大変な時、両親は「心配しなくていいんだよ」と言ってくれた。でも、両親は歯をくいしばってあれからずっと必死に働いている。今は、僕よりも両親の方が何倍も辛く、悔しいはずだ。両親にしたら、裸一貫でこの土地で会社を興し、地元で根ざし、信頼を築き、絆を強めてきたのに。この住み慣れた地元を去らなければならない辛さは、僕なんかの比ではないはずだ。「人生はいろいろあるんだよね」。母はそう言って、何でも受け止めて、辛さをパワーに変えてきたのだ。僕がここで愚痴を言うことなど、どうして出来るだろうか。「街なかに住んでみるのも面白そうだね」と、僕は母の顔を見てきっぱりと言えた。地元を離れ、仙台に行くということは、必然、学校も変わるということを意味する。中二の途中からの転校は、正直、不安だらけだった。新しい環境に慣れるためのエネルギー、新たに作る人間関係、そして勉強の進捗についても……。

考えれば考えるほど、押し潰されそうになる自分を僕は必死に元気づけていた。

主人公が言っていたように、人生という道路にも標識があったらどんなに楽だろう。標識を見て、辛さや悲しみを回避できたら、こんな楽なことはない。主人公だって、まだ高校生なのに、家族の問題を抱え、毎日がどんなに重苦しいものだったろう。特にアル中で娘を困らせる父親はどうしようもない。僕の父は全く飲まない。周りにも酒飲みはいない。だから、酒を飲んで人が変わるというのもあまり理解できない。ジェナの父親を通して、人生を狂わせてしまうアル中というものに嫌悪感を持った。自分の娘をあんなに困らせるなんて、父親とは呼べない！僕は改めて自分の父を誇りに思う気持ちが強くなった。

ジェナはひどい父親から一時でも逃れたくて、女社長のドライバーを引き受けた。結果的には、その旅は彼女にとって、大いなる「学び」の旅になったと思う。僕も、ジェナと一緒に社長にお供して六週間の旅をした。商売人の父を持つ僕にとっても、とても有意義な旅だった。頑固そうな社長だが、彼女の手柄に触れることが出来た。「品質第一」を貫く商売人としての誇り、その「商売の心」は僕の父にも通ずるものだった。靴売りのプロとも言えるハリーからは、暗闇を恐れない事を教わった。株主総会に乗り込んでいくジェナを僕も応援した。「悪」を許さないという凜としたあの演説はとてもカッコ良かった。

今、新しい風が吹いている！現実の苦しみから逃げようとしていたジ

エナは、もうどこにもいない。彼女は真正面から父親に向かっていった。酔った父親を逮捕させたのも、愛すればこそである。ジェナは、自らの力で新しい靴を手に入れた、まさにパワフルな「シンデレラ」に生まれ変わったのだ！

僕も新しい環境に慣れ、受験生として今、頑張っている。父も人を使う立場から組織の一員として頑張っている。母は「狭い我が家も楽しいもんだ」と笑っている。

人生の標識は自分自身が作って、自らの足で進んでいくしかないのだと改めて思った。

対象図書名 靴を売るシンデレラ

### 大賞へ、審査員のひとこと

自分を語る、自己開示がベースになっているこの作品がすぐれている点は、物語の中で自分の知らない世界に入っていく体験をしながら、未経験なことにごう共感するのがきちんと描けていることです。

〈僕も、ジェナと一緒に社長にお供して六週間の旅をした。〉からの一節は、作者が物語に入り込むという珍しい展開です。そして、それが主人公と自分の「新しい風」につながっています。

自己の体験が物語の未体験世界への共感に結びつき見事に表現された

すばらしい作品です。

## 受賞者のくみん

「夢のようだね」と、先生が感慨深げに言った。まさか三年連続でこの様な素晴らしい賞を戴けるなんて、考えもしなかった。

思えば、小学三年生で入塾して以来今日まで、自分の人生の半分近くの年月を先生に指導して頂いたことになる。国語力の重要性を考えての入塾だったが、この六年余り、単に国語という教科的な学習にとどまらず、「心の持ち方」や「生き方」など、多くの大切なことを先生に教えて頂いたように思う。先生との出会いがなければ、今の自分の成長もなかっただろうし、この大きな受賞もあり得なかったと思う。

作文を書くに当たり、先生はいつも口癖のように、「自分しか書けない、まさに自分らしい作文を書くことに全力を尽くそう」と。僕もそう思って、今までは賞を意識することなく夢中で書いてきた。でも今回は違う！中三生の僕にとっては最後の年、そして表彰会場が会長の地元三重県となれば話は別だ。僕は考えを掘り下げ、粘りに粘って書いた。会長の地元で表彰されたい！その念願が叶って本当に夢のようだ。

以前にも増して毎日必死に働いている両親。二人とも「疲れも吹き飛ばね」と言っていて喜んでくれた。その両親と一緒に最後の表彰式に出席できることが僕は何より嬉しい。

## 中学生の部・最優秀賞(中一)

### 「音楽の奇跡」

柳田 佑真

世の中に、音楽が好きなのは大勢いるだろう。楽器や歌を好んでやっている人も多いだろう。でも、それを職業として、一生続ける人は、それほどいないと思う。まして、マリア達のように、多くの人に「感動」をもたらすだけの歌が歌える人となると、それほどいないはずだ。

僕がピアノを習い始めたのは小学二年生の頃だった。風邪をひいて学校を休み退屈していたばくに、母親が「猫ふんじやった」を弾いてくれたのがきっかけだった。それを聞いて、落ち込んでいた気分がとても明るくなったのを覚えている。たった一曲の曲が、気持ちをこんなに変えるものかと驚いた。それ以来ぼくは、ピアノに夢中になった。ひまさえあれば、ピアノに向かっていった。こんなに楽しい世界があるものかと時間のたつのも忘れる程だった。一年たって、少し難しい曲も弾けるようになった頃、「発表会」の話があった。ぼくはそれまで、人前に出て何かをすることが出来るタイプではなかったので、「発表会」と聞いただけで緊張した。自分が楽しむためだけに弾いていたので、人に聞いてもらうなんて考えてもいなかったのだ。いざ、自分の番になった時、ぼくもマ

リア達と同じように緊張のあまりぎこちない足どりでステージに進んだ。顔もこわばっていたにちがいない。幸いにも指は練習通り動いてくれた。演奏し終わった時、大きな拍手をもらい、達成感でいっぱいになった。自分だけの楽しみの世界から、一歩踏み出した記念すべき日だった。

それ以来、学校でも僕の演奏を披露する機会が何度かあり、僕は喜んで演奏した。そして、あることに気づいた。自分が心をこめて弾いた時、それは聞く人に届くのだと。そして僕のピアノを聞いて感動してくれる人がいることに僕の方が感動していったのだ。

マリア達の歌は最初からレベルが違っていた。音楽を心から純粋に楽しんでいたということは僕も同じだが、彼らの歌は、「芸術」と評されるものだった。自分たち家族だけで楽しんでいるのはもったいないと、誰もが思うはずだ。他の合唱にはない、「トラップファミリー」ならではの独特の歌声。その美しい歌声でどんなに多くの人が魅了されたことか：。人に感動を届けることができるなんて、本当にすばらしいと思う。

マリアは、よく「神の御心」と言っていたが、確かにマリアがトラップ家に来ることそのものが、運命だったのだろう。堅苦しかったこの家に新風を吹き込み、みんなの考え方まで変えていった。マリアは型にはまらない大らかさと明るさを持っている。その影響力は本当に大きかったといえる。彼女に育てられた子供達はしっかりと信念を持ち、みんな強くなっている。

「型にはまらない」という点で、ぼくはふと自分の母親もマリアに似

ていると思った。「人の意見に左右されないで、自分の意見をちゃんと持ちなさい。」と幼い頃から言われて育った。だから、疑問に思ったことは納得のいくまで、聞くことにしている。この性格のため、皮肉なことによく母親とぶつかる。ぼくは何かと「なんで？」とぐろぐせのように言うからだ。小学校時代は授業中、先生を質問せめにしたせいで授業が進まず、よく先生を困らせていた。ぼくが手をあげると、「また、柳田か。」と、先生はため息をついたものだった。今まで、変わり者のように見られ、これは損なのかと思ったこともあった。

ぼくは、今回、マリアに元気をもらえた。マリアの「型破り」は、スケールが大きい！銀行が破産してお金がなくなっても、めげるどころか、「私たちは何て幸せなんでしょう。」と言つてのけたのだから。子供たちのすばらしさに気付くことができた。その喜びの方が勝っているのだ。本当に前向きだ。そう考えるからこそ、自分たちの人生を切り開いていくのだろう。実際、お金では買えない、すばらしいものを手にした。心を通わせる仲間だったり、家族の強い絆だったり、何ものにも屈しない強い心だったり…。

ヒトラーに従っていれば物質的な幸せを手に入れることはできた。でも彼らは、貧しくても自分たちに正直である生き方を選択した。それは祖国を愛し、心から音楽を愛していたからだと思う。その魂を売り渡すことなど彼らにはできなかったのだ。そんな強い絆で結ばれている歌だからこそ多くの人の心を打つのだと思う。

苦境に立たされた時こそ、その人の真価が問われるのだと強く感じた。

## 中学生の部・最優秀賞(中二)

対象図書名 サウンド・オブ・ミュージック

「当たり前」、イコール

大平 早紀

### 受賞者SOULJYU

二年連続の最優秀賞！素直に嬉しい。去年は、入塾したばかりの僕が、いきなり最優秀賞をいただき、なかなか実感が湧かなかった。僕はただ舞い上がっていた。父も「これが初めて最後だろう。」と何度も言っていた。確かにそれまでの僕は、作文で賞を取るなんて、全く無縁の人間だった。でもこの塾に入ってから、明らかに変化が起きた。文章を書くことが結構楽しいと思えるのだ。「自分のことを好きだけ書く」というやり方が、僕にとってはやる気にもつながっている。先生のアドバイスで、原稿用紙がどんどん増えていく。今回もいつものまにか三十枚を越えていた。あら筋ばかりを書いていた以前の僕とは大違いだ。

こうして、去年の最優秀賞をきっかけに、僕は作文を書くことに本気スイッチが入った。「最初で最後だろう。」と言った父親の言葉も僕を奮い立たせた。身近に三連覇を成し遂げた松木先輩がいる。とても刺激的だ。

先生は「賞を取ることより、文章を書くことを楽しもう。」と言うが、正直僕は、両方を欲張っていきたい。

「どうしてだろう。」

私がこの本を読んだ時、いちばん初めに感じたことだ。

この本の主人公、高柳丈夫の姉、恵。重いてんかんをもつ少女だ。この少女に対して、最初に書いた疑問が浮かんだ。

恵は、『トウハテイ』という葬儀社の手伝いで、セレモニーをおこなっていた。だが、てんかんの重積状態によって命を落としてしまう。恵は日記をつけていて、その中に

『あたし、死ぬのがこわい。すごく、こわい。』

という言葉があった。だが、

『あたしより、もっと、つらくて、苦しくて、悲しい人はいっぱいいる。

高柳恵は、けっして悲劇のヒロインじゃない。』

どうして。自分があまり長くないことはわかっている。それも怖くて怖くてたまらない。それなのになぜ、他人を思いやり、心配することができるのか。私はそれが不思議で仕方がなかった。

トウハテイの仕事を、恵は人一倍心をこめて手伝っていた。理由は、

自分の死を受け入れるため。その時、恵は何を思っていたのだろうか。自分ももう少しでこうなる、そう思つてとても苦しんだのかもしれない。けれど、故人を安らかに見送ることのできる、すばらしい仕事だとも思つていただろう。重いてんかんというハンディがあつても、一人の人間として立派なことをやりとげた恵。命が尽きるまでの短い時間を、明るく、前向きに、精一杯生きた恵。死の恐怖をはねのけた恵。たくさんの『強い恵』が、そこにはいた。

恵を亡くした丈夫はふさぎこみ、誰とも話さず、部屋にとじこもり、恵のことばかり考えるようになった。

私も丈夫とは少しちがうが、同じような経験をしたことがある。

私には一つ下の弟がいた。今から十一年前、弟は亡くなった。庭にある池で溺れて。記憶もはっきりしない幼い頃だったが、母の泣いている姿と弟の死に顔だけは、今でも鮮明に、写真のように覚えていいる。その二つだけは本当にはつきりしていて、不思議に思ったことがある。

みなさんにとって、「今日」というのはどんな日だろうか。とても暑かった日、うれしいことがあつた日、おもしろいマンガが発売される日、好きな番組が放送される日、待ちに待った家族旅行の日、友達と遊ぶ約束をした日……。たくさんの「今日」があるだろう。だが、こんな考え方はどうだろう。

『日本のどこかで、世界のどこかで、誰かが死んだ日』。理由は、事故、自殺、事件、たくさんあるだろう。その中には、戦争や病気でやむをえ

ず死んだ人たちもいるだろう。飛び交う銃弾に怯える人たちが、襲いくる病魔に苦しむ人たちが、死にたくない、まだ生きていたい。そう願っていた人たちが、

「あと一日」、  
そう切望しながら死んでいった、「今日」でもある。そうは思えないだろうか。

私は生きている。当たり前。五体満足である。当たり前。満足な食事がとれる。当たり前。安心して寝ることができる。当たり前。読み書きができる。当たり前。

私にとっての「当たり前」が、「当たり前ではない」、あるいは「不能」。そんな人たちがたくさんいる。世界中に。いや、この小さな島国、日本にも。

その「当たり前」が、どれ程幸せなことか、たまに忘れることがある。

「私は字が書ける。当たり前だ。手があるのだから。」  
仮にあなたがそう思っているとしよう。

ある日突然、あなたは事故にあい、両腕を失う。目が覚め、自分のあつたはずの腕を見ることができなかつたとき、あなたは思うだろうか。以前のように

「字なんて手があれば書いて当然。」

……言うことができるだろうか。私にはできない。なぜなら、「当たり前」ではないから。「当たり前」を失ったから。

「ヒト」という動物は、自分が絶対的に信じているものが崩れ去ったとき、なにもできなくなる。いままでできていたことが。「信じる事」さえも。不思議なものだ。赤ん坊でもないのに。なぜ。受け入れられないから。自分の直面している「当たり前」が。

「当たり前」。何よりも軽そうに見えて、何よりも重い、大切なもの。

「当たり前前」。それは自信。それは心の拠り所。そして、とても幸せなこと。自分自身の「当たり前」を、もう一度しっかり見つめてほしい。そうすれば、気付くことができるだろう。自分がどれほど恵まれているのかに。そして、「当たり前」のその意味に。

対象図書名 さつさら春風「もしも」はすべて

### 受賞者のこと

私が今回読んだ『さつさら春風』は、共感できるところがたくさんあった一冊でした。また、私自身、丈夫と同じような出来事を経験したことがあります。そこが、たくさんあったなかで一番共感できたところでした。

そして、丈夫の姉、恵の日記は一番印象に残りました。自分はとても辛いのに、弟である丈夫を元気づけたりできる強さは、本当にすごいなあと感じました。私も、そんな恵のつよさを見習って、誰にでも優しくできる、強い人間になりたいと思いました。

### 中学生の部・最優秀賞(中三)

#### 後悔そして前進

平松 奈々

もし、私がこの学校の先生だったら、きつと言うことを聞いてくれない三人を見捨て見向きもせず放っていただろう。でもこの先生は違った。とても心が広い人だった。

私は前に学校の先生とうまくいかないことがあって、生意気な口をきいて反抗したことがある。この本を読んで「ヤンキー」と言われている男の子二人の気持ちが良くわかった。

つい最近のことだ。私は進級して三年生になった。教科の先生も担任の先生も変わり、毎日がすごく楽しかった。二時間目、私の大好きな体育の授業だった。すごく楽しみだったはずの体育だったのに、最悪な授業になってしまった。

進級するとともに体育の先生も変わった。二十五歳くらいの若い先生になった。髪はポニーテールっぽく結び、緑のジャージを着て化粧がすごく濃いめの先生だった。みんなから、

「かわいい」

と、言われてすごくニコニコしていた。でも授業をするにつれて先生の

態度も変わってきた。

その日の体育の授業はバレーボールだった。私は体育の授業の前にバレーボールをさわったら、いきなり頭ごなしに

「テメーふざけてんのかよ。ボールは授業中にさわんだよ。なめてんのか。」

と、怒鳴られた。私はすごく驚いた。その時私は冷静でなんかいられなくてつい、

「別にふざけてもなめてもいませんけど。」

といい、その場から去った。周りはとても静かになってしまい雰囲気が悪くなってしまった。でも私はその先生にムカついて近くにあった壁を足でけてしまった。自分が最悪なことをしたのはわかっていて。自分はあることを言われたぐらいでムカツクなんて心が狭いなと思った。それでも私は意地をはり、その日からその先生と口をきかなくなった。と言うよりも自分から先生を避けていた。先生が私たちの所にきて話にきても私だけはシカトしていた。

それから少し間があいて友だちと学校から帰っているとき私に怒鳴ったあの先生が、

「こんにちは。ねえ、二人で一緒に帰らない。」

と言ってきた。そんな最低な先生と帰りたくなかったら私はその先生に

「無理。いやだ。」

と、言って友だちと走って逃げた。先生は見えなくなり、走って追ってくることもなかった。それから私はその先生が怖くなった。最悪なことにその週は体育の授業が三日連続であった。こんなに体育の授業がいやだと思ったのはじめてだったけど、きちんと授業には参加した。バレーボールが終わり、次の授業は創作ダンスだった。私はダンスが大好きだったけどグループ決め、曲決め、グループの名前決めの時まで全て先生が近くにいた。頑張って話を合わせて私たちのグループに入ってくようとしているのがすごくわかった。自分はその場を離れた。こんなことしたら先生の態度も逆に悪くなるし、成績だって下がることはわかっていた。それでもその場を離れた。すると先生もいなくなり、そのグループは生徒だけになった。私はもう一度グループにもどり曲決め、グループの名前決めに参加した。次の日の授業の時もその次の日の授業のときも先生はしつこく私たちのグループに来た。他の友だちもさすがにうんざりしていた。

ある日、昨年の体育でお世話になった先生が私に言ってきた。

「今、体育の先生に反抗してるでしょう。この前話きいたわよ。ダメじゃない。成績さがっちゃうよ。」

と、言われた。この先生はなんて聞いたかはわからなかったが、私が悪いように聞いたらしい。私は先生にきちんと訳を話した。すると先生はもう一度話してみると言ってくれた。次の日その先生はきちんと聞いてくれた。先生はこう言った。

「はじめての生徒で、どうしたらいいかわからなくてすぐに怒鳴ってしまった。」

と言ったそうさ。私と仲直りをしたい。でもうまく話せない。そう言ったそうさ。だからその避けている先生に自分から話してみって言われた。それでも私は話せなかった。本当に心が狭い。意気地無しだと思う。相手はちゃんと仲直りするチャンスを作ってくれていた。なのに避けてしまっていた。最低なのは私の方だったのかもしれない。

今度会ったときは私の方からチャンスを作ろう。そう思った。

対象図書名 ハミダン組！